

解答

一

① 反省

② 見聞

③ 推移

④ 正味

⑤ 背後

二

① 9

② 13

③ 10

④ 19

⑤ 99

三

問一 A エ B ウ C オ D オ E イ

問二 たいして幽霊の自覚もなく、陽気なところ。

問三 ウ 問四 エ 問五 イ 問六 オ 問七 ア

問八 a 心残り b 残してきた娘であることを知り、感動する

c 不満な d 別れをいやがり、泣き出した

四

問一 イ

問二 人間の滋養となる生命の根本的なものがなくなり、目に見える物質だけが残された状態。

問三 自分のために犠牲になる生命にありがたみを感じ、霊的世界やそれを形成する神々に感謝をささげるため。

問四 エ 問五 ア 問六 イ 問七 近代化

解説

二 それぞれの語句は、次のようになります。

① ・一寸の虫にも五分の魂。 ・早起きは三文の得。

② ・一を聞いて十を知る。 ・瓜二つ。

③ ・三寒四温。 ・石の上にも三年。

④ ・仏の顔も三度まで。 ・口八丁手八丁。

⑤ ・十把一からげ。 ・夏も近づく八十八夜。

三 出典は、角野栄子「ラストラン」。

問二 傍線部①の直前には、ふーちゃんが赤いバイクのことで「目が輝いて興奮してる」場面が描かれています。これは、イコちゃんの想像する「柳の下あたりに、陰気にさまよっているもの」というゆうれいの姿とは正反対の姿です。ゆうれいらしくない、陽気な姿を見て、イコちゃんは「へんなゆうれい」と思ったのですね。

問三 傍線部②までにある、ふーちゃんのセリフをていねいに読み取りましょう。「ずっとかんがえてはいるんだけど…それが、ぼーんやりしてるのよ。でもね、ここ、胸の中にあたしの心残り、確かにぶらさがってる。重たいのよ。あきらめればいいんだけど、それができないのよ。早くかるくなりたいよ」と自分の心残りについて打ち明けています。しかし、「あたし、十二だから、おかあちゃんやおとうちゃんの、ことばぐらいしか、記憶にないのよ。思い出がないって言うのは、力がないってことだわねえ」「おかあちゃんのことば、とってもなつかしいけど、これは心残りとはちがうような気がするの」「あんなふうにとこか遠い所に行ってみたかった。それが心残りなのかなあ……」とあるように、心残りの原因が何なのか、はっきりと思い出せません。それをじれったく感じ、心残りの原因を思い出そうとして、「探るように、手で自分の胸のあたりをなぞっている」のです。

問四 傍線部の「動き」とは、直前部の「あの写真を見せればすべて解決する」と思い、「一歩乗り出した」こと、すなわち、写真を見せて、ふーちゃんの心残りを取り除こうとすることですね。その「動きを止め」たのはなぜでしょう。イコちゃんの独白の続きを見てみましょう。「心残りの元がこんなおばあさんまで生きてゝ安心して、さっさとむこうの世界に行ってしまうかもしれない」「私はもう少しこの可愛い女の子のそばにくっついていたいかった」とあります。ふーちゃんが可愛らしく思えてきて、もう少し一緒にいたいと思ったので、ふーちゃんが成仏して錆々になつてしまわないように、心残りを明らかにしなかったのです。アは「あきれて」の部分が、ウは「心残りのことなどすっかり忘れて」がそれぞれ×。

問五 イコちゃんの叔母は、傍線部直前にある通り、「うちの宿商売はね、おとうちゃんがつくった鉄道のためにつぶれた」ということを「皮肉」と表現しています。その「宿商売」は、後の（注）にあるように、「吉井川の鉱石運搬船の船員を泊めるための宿屋」でした。これらの内容から正解を判断します。

問六 傍線部⑤の直前の「もう死んだのかもしれない。ちゃんと」を、普通の語順に直すと、「もう、ちゃんと死んだのかもしれない」となります。「ちゃんと死ぬ」ことのできなかったふーちゃんは、「ゆうれい」としてこの世に残っています。のんきなふーちゃんも、自分をこの世に引き留める重たい「心残り」のことを「ちゃんと」して、「ちゃんと」成仏したいと思っているのでしょうか。

問七 「ラスト」は残りの、最後の、「ラン」は走ること、の意味。ここでは、七十四歳のイコちゃんにとっての、最後のバイクの旅のことです。イコちゃんにとってこの「ラスト ラン」にはどんな意味があるのか、傍線部を含む形式段落、「ラスト ラン」についてのイコちゃんの独白に注目して考えます。「この私にもいろいろ恋はあったけど、仕事に夢中になっていて、いままで結婚にも、子どもにも恵まれなかった。それはやっぱり心残り」とあります。また、傍線部⑤の7〜9行前に、「十二歳の時の私とは違う。そして、自分の母親が死ぬなんて……と理不尽に思えた。それをこの歳になるまで、引きずって消えることはなかった」と書かれています。これもイコちゃんにとっては心残りにあたります。これらの心残りを晴らすために、イコちゃんはふーちゃんという「これ以上望めない素敵な相手」を連れて、人生最後（＝ラスト） かもしれないバイクの旅に出るのです。また、問題とは直接関係ありませんが、このバイクの旅はもしかしたら、ふーちゃんにとっても「心残りを晴らす旅」になるのかもしれませんね。

問八 前半の場面でイコちゃんはふーちゃんに対して、「私にしてみれば、ここで、『実は、残してきた娘たちが心残り

で、成仏できなかったのよ』とドラマチックに打ち明けてもらいたかったんだか訳もなく私は不満になっていた」という感情を抱いています。この部分から、a cに当てはまる言葉を判断することが可能です。また、dについては、波線部の直前の部分の、「また、来るわ。会えるといいね」と言ったイコちゃんに対するふーちゃんの反応、「やだ、行っちゃ、やだ」と別れをいやがり、泣き出しそうになるようすをまとめます。

四 出典は、内山節「日本人はなぜキツネにだまされなくなったのか」。

問一 傍線部①と同じ段落に、「まず第一に、オオサキは実在する動物なのかどうかあやしい」という筆者の考えが示されています。ここから、「オオサキを捕らえた人」の発言を疑っている、という意図が読み取れます。

問二 傍線部②をふくむ一文を読み返すと、「後にはミを食ったあのカラだけが残っている」とあります。ここでいう「ミ」「カラ」とはそれぞれ何か、本文の続きをよく読みましょう。すると、傍線部③をふくむ段落に、「ミとは魂と書いてもよいし、霊と書いてもよい。つまり、生命の根本的なものをいitたく、ということである」と書かれています。その直後に、「カラ」については「ミを入れている容器がカラである。食べ物としてみえているものはカラで……」と説明されています。したがって、「カラだけが残っている」とは、「生命の根本的なものがなくなり、目に見えるものだけが残っている状態」であるといえます。この内容が伝わるようにまとめましょう。

問三 傍線部③の後に、「食事とはミをいitたくことで、いわば生き物の生命をいitたくから、食事とは他の生命を摂取することなのである。だから、自分のために犠牲になる生命への感謝が必要になる」とあります。さらに、食事のときの祈りの対象として、「神ではなく、霊的世界になる。あるいは絶対神ではなく、霊的世界を形成する神々である」と書かれています。「犠牲になる生命への感謝」「霊的世界やそれを形成する神々への感謝」が読み取れるように、解答をまとめるとよいでしょう。

問四 オオサキの「秤に乗る性格」について具体的に書かれた、傍線部を含む形式段落に注目して、オオサキがどのような動きをするのか、確認します。④の直前に、「荷のほうに乗るようになった家では、少し軽い荷でよくなるから余分に収入があり、逆になった家では、少し余分に荷を積まなければならない」とあります。

問五 傍線部の「それ」は「オオサキ払いの儀式」を指しますから、「オオサキ払いの儀式」と「真剣」に注目すると、最終段落に、「ただしオオサキ払いが真剣なものだったという事実は、私たちの世界は目にはみえない生命や霊的なものの介入をたえず受けながら展開している、という伝統的な人々の考え方を垣間見させる」とあるのが見つかります。

問六 傍線部⑥の直前に、「こういうときに、犯人としてオオサキが登場する」とあります。指示語「こういうとき」の指す内容は、直前の段落の「同じことをして少しずつ差が開いていく村そのものも雰囲気が悪くなる」の部分です。村でクラスメンバーの間に差が開いていくようなとき、それをオオサキという目にはみえない霊的な存在のせいにするので、不平等に対する不満を村のメンバーに向けられないようにして、村の雰囲気が悪くなるのを避けたのです。

問七 「伝統」という言葉をキーワードにすると、問三で確認した形式段落の次に、「近代化とともに食事で摂るものが生命から栄養に変わり、伝統的な食事の作法も崩壊した」とあるのが見つかります。この部分から、伝統的な考え方の失われた原因は「近代化」にあると判断できます。